

# アントレプレナーシップ研究と中小企業研究

同志社大学商学部教授

関 智 宏

## 1. はじめに

本稿では、アントレプレナーシップ（研究）が中小企業（研究）とどのような諸点において関連があるかについて、日本の研究者だけでなく、実務家や政策担当者などにも理解することができるように、それぞれの諸研究の特徴をとりあげながら、筆者なりの説明を試みることを目的とする。以下では、タイトル以外において、紙幅の制約からアントレプレナーシップを ENT と略する。

このような課題を設定したのは、ENT 研究と中小企業研究がますます接近しているためである。国際ジャーナルのなかでも、たとえば、*International Small Business Journal* などの中小企業関連の国際ジャーナルのいくつかが、ENT の研究領域と融合している（そのジャーナルの副題に Researching Entrepreneurship と明記されるようになっていく）。しかしながら、ENT 研究と中小企業研究とがどのような関連を有するかについて、ENT の概念と整合させて説明した文献はほとんどみられない。

しかし、そもそもの問題は、ENT がいったいどのような概念であるかについて、日本で世界的な諸研究の潮流を踏まえた包括的な説明がほとんどなされていないことにある。ENT 研究は 1980 年代から大幅に増加しており、1 つの研究領域として確立されている（Ireland et al., 2005, p.558）。また、これまでも、ENT に関連した日本語の書籍はいくつか刊行されている<sup>1</sup>。しかしながら、ENT に対して国際的な研究関心が高まっているにもかかわらず、後でも見るように、未だ日本では ENT は企（起）業家精神であるという以上の理解がなかなかされていないのである。

このような問題意識から、本稿では、まず ENT とは何かについて、ENT をめぐる国際的な議論を整理し、それを説明していく。次に、中小企業を研究する視

---

<sup>1</sup> たとえば最近において刊行されたものとして、山田・江島編（2024）あるいは清水（2022）などがある

点について、ENT 研究との接合を意識しながら、中小企業を分析する視点という観点から説明する。以上を踏まえて、ENT 研究と中小企業研究との関連について説明する。

## 2.アントレプレナーシップとは何か

### 2-1. アントレプレナーシップの語源と誤解

ENT がどのような概念であるかを考える前に、この語源について触れておく。ENT は英語で entrepreneurship と表記される。すなわち entrepreneur にその質や状態、あるいは技能や能力といった属性などを示す ship が組み合わさった名詞である。ここでいう entrepreneur というのは英語としても知られているがその語源はフランス語の entre (between : 間) と preneur (taker : 受取人) が組み合わさった語である。さらに振り返れば、マルコポーロ時代 (13 世紀) に生まれた entreprendre という動詞からの派生であり、間を取り持つ人、すなわち現在でいうところの仲買人や貿易商などの人物を指す。学術的には、18 世紀にフランス人の経済学者である Cantillon が、新しい産業の担い手として、アントレプレナーを新しい産業 (事業) が生じることと関連づけて紹介したことに端を発している (Cantillon, 1931)。その後、ドイツやオーストリアの研究者が ENT 研究を発展させていった。

第二次世界大戦後には、オーストリア学派の研究者の一部が、亡命先のアメリカにおいて ENT の研究を展開させた。たとえば、その代表的論者の 1 人、Drucker による代表的著作である *Innovation and Entrepreneurship* (Drucker, 1985) は、日本でも良く知られているところである。ところが日本では、この Drucker の著作が『イノベーションと企業家精神』という日本語のタイトルで出版された。このことから、日本では ENT は精神論との関連で認識するような傾向が出てきた。日本政府も、文部科学省が今後必要となる「認知能力」の 1 つとして、ENT を起業家精神としており、これを創造的なマインドセットと関連させている<sup>2</sup>。果たして ENT は企 (起) 業家の精神論のことだけを取り扱っているのだろうか。

---

<sup>2</sup> [https://www.mext.go.jp/content/20210728-mxt\\_sanchi01-000017123\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210728-mxt_sanchi01-000017123_1.pdf) (2024 年 8 月 31 日閲覧)

## 2-2. 個人（精神論）か組織か？ そして機会への着目へ

ENT を精神論としてみるのは日本だけのことではない。アメリカでの ENT 研究は、アントレプレナーの研究として展開された。すなわち、entrepreneur と non-entrepreneur（さらには manager）との違いについての探究である。たとえば、Webster は、急成長する企業のアントレプレナーの特徴を（Webster, 1977）、また Gartner は、成長する企業を牽引する企業家の諸特徴を探っていた（Gartner, 1985）。こうしたなかで新しい研究展開としてみられたのが、Baron を代表的論者とする認知心理学における研究展開である（Baron, 1998 など）。ここではアントレプレナーが、高い不確実性、新規性、時間的プレッシャー、ストレスなどの諸条件に応じ、認知ヒューリスティック（直感的判断）をもちいて思考、推論する傾向にあることを指摘した。

その一方で、ENT をめぐっては、アントレプレナー個人でなく、企業の行動としても研究が展開された。たとえば、Lumpkin と Dess は、新規参入をおこなうことで高い企業成果を達成している企業（entrepreneurial firm）と、一般の企業との区別をおこなう Entrepreneurial Orientation（EO）を提唱し、革新性（innovativeness）、リスクテイク（risk-taking）、先取性（proactiveness）、自律性（autonomy）、競争力のある積極性（competitive aggressiveness）という5つの要素が企業成果にとって重要であることを示した（Lumpkin and Dess, 1996）（なお先の3つの要素は、Miller（1983）および Covin and Slevin（1991）による）。

また、急成長する企業はアントレプレナーがそれを牽引しているが、急成長している理由はアントレプレナーが機会を得ているためであるとし、これまでの考え方ではアントレプレナーという個人（individual）と事業の機会（opportunity）とが結びついてしまっている（I-O ネクサス）が、実際には、個人と機会は分かれており、I-O ネクサスを切り離そうという考え方が出てくるようになる。これは Shane と Venkataraman がその代表的論者であり、「将来の商品やサービスを生み出す機会がどのように、誰によって、どのような効果をもって発見され、評価され、活用されているのか」というように、機会を発見し、評価し、活用していくさいの個人（認知的能力）とそのさいのプロセスを、別個に検討するという考え方である（Shane and Venkataraman, 2000）。こうして ENT 研究は、「アントレプレナー」（個人ないしチーム）、「（急）成長企業」（組織化の方法）、「機会」

(環境条件) という 3 つの分野 (+ 環境) が交差する研究領域という特徴を有するようになった (Busenitz et al., 2003)。

## 2-3. 機会はそこにあるのかないのか

### —発見 vs 創造の論理、そして動態的視点へ—

機会は、ENT 研究の主要なトピックの 1 つである (Dimov, 2007)。そこでの議論の中心は、ある人は機会を認知しているが、ある人は認知しないといった、機会を発見するという認知的視点からみた諸研究であり、アントレプレナー個人に焦点を当てた研究が独自に展開されていった (Shane, 2003)。そこでは、機会を見たり、あるいは開拓する能力 (Shane, 2003)、ヒューリスティックな思考など精神的プロセス (Baron, 2004)、知識ストック (Corbett, 2005; Ward, 2004) といった個人差であったり、あるいは起業する意図 (Krueger, 2000)、学習プロセス (Brixey et al., 2012)、また起業する情熱 (Cardon, et al., 2009) や感情 (Cardon et al., 2012) といった個人の精神にあらためて関心が寄せられた。

これらの見解に共通しているのは、機会を発見することができるといった機会の客観的な存在の前提である。しかしながら機会の客観的な存在はあくまで前提ではないことも指摘されている。たとえば、Alvarez と Barney は、アントレプレナーが機会を形成し、活用するためにとる行動に着目し、その機会の創造を提唱した (Alvarez and Barney, 2005)。

このような機会の創造は、個人ないし組織の能動的な行動へと関心が移っていく。たとえば、Sarasvathy は、人間の生活は、簡単に分析や予測をすることができないために、合理的選択 (causation: コーゼーション) に代わる別の論理としてエフェクチュエーション (effectuation) を提唱した (Sarasvathy, 2003)。ここでは、1 つに、予測も事前の目標も利用できず、合理的選択ができない場合においても、アントレプレナーは「その場から立ち上がる」ために (Dew and Sarasvathy, 2002)、途中で変更や修正ができることで予測しないような複数の結末を生み出すこと、2 つに、アントレプレナーは、利用可能な機会を合理的に評価したり計算したりするのではなく、自分が行動したいと思う「選択肢そのもの」を能動的に作り出すことから (Sarasvathy, 2003)、行動の非目的論的側面が説明されること、3 つに、能動的な行動の結果から、環境に積極的に影響を与えるこ



と (Steyaert, 2007) の特徴がある。こうして、アントレプレナーは、判断力を発揮する個人であるが、起業するためには、判断するだけでは不十分であり、行動することを決断しなければならない、不確実性の下で価値のある機会について判断に応じた行動たる起業行為を生じさせることが必要とし、起業という行動を実現させていくさまざまな行為にかかる意思決定へと関心が広がっていくことになる (McMullen and Shepherd, 2006)。

## 2-4. 個人／組織と社会との接合

こうした行為への着目は、ENT 研究をいっそう動態的視点へと展開させていくことになる。名詞として (実体) の ENT (McMullen et al., 2021 ; Rindova et al., 2009) ではなく、動詞として (実践) のアントレプレネリング (entrepreneuring) として理解しようとする動きがある。ここでいう実践は、社会構成主義の関係性志向と結びつく社会的実践のことである。つまり、ENT を、人々が直接実行する身体的な行為や発現によって実行される、開かれそして時間的に展開される行動のネクサス (Schatzki, 2005) として説明しようとする。このように ENT を捉えると、それはここまでみてきたような個人の特性でなく、非個人的な現象として実践の組織を捉えることができるようになる。

アントレプレネリングを提唱する論者の 1 人が Steyaert である。Steyaert は、その概念の有用性として、1 つに、生きた世界と経験のなかにプロセスを位置づけることで、ENT の理解を「濃くする」のに役立つこと、またもう 1 つに、生活し観察可能な経験に接続し、文化、政治、社会の力の織り交ぜを強調することで、概念的な焦点を変更すること、を指摘している (Steyaert, 2007)。このようなかたちで ENT を捉えなければならないのは、1 つに、ENT が富の創出に焦点が絞られすぎていたこと、さらにもう 1 つに、市場機会の発掘や成長企業の成立を伴う経済活動と定義する機能主義的・実証主義的な前提にとらわれてきたこと、といった問題点がある。だからこそ、ENT は「社会的な変化をもたらす可能性のある経済活動」から、「多様な変化をもたらす可能性のある社会的な変化活動」としての ENT へと再定義する必要性が主張されるのである (Calas et al., 2009)。

## 2-5. プロセスとしてのアントレプレナーシップ

ENT をプロセスとして把握しようとすることは、いまや ENT 研究の中心になりつつある (Chiles et al., 2007 ; McMullen and Dimov, 2013 ; Moroz and Hindle, 2012)。そのなかでも、創造的で社会的・集団的な組織化のプロセスとして ENT を捉えていこうという試みがある (Johannisson, 2002)。その代表的な議論の 1 つが、解放 (emancipation) としての ENT である (Rindova et al., 2009)。

Rindova らは、移民が先の国や地域でいかにして社会的地位を確立させていくかというプロセスを解放としての ENT という観点から捉え、別の権威による制約からの解放 (「自律性を求める」こと)、行為の主体者として関係性や取り決め、また関与のルールを定義づけする (「オーサリングする」) こと、そして変化を生み出す行為者の意図にかんするあいまいな言説的・修辭的行為 (「宣言を行う」こと) を中心的概念としながら、その解放のプロセスを具体的に示した。個人または個人のグループの行動をつうじて、新しい経済的、社会的、制度的、文化的環境をもたらす努力を ENT として捉えたのである (Rindova et al., 2009)。こうした議論は、その後の研究に大きな影響を与え、ジェンダー、貧困など社会課題の実証研究へとつながっていくことになった。

このようなプロセスとしての ENT という視角は、次のような意義がある。1 つに、継続的な創造的な組織化として ENT を捉えることによって、活動の集合体に (個人的な) 関係性の束が含まれることになり、行為と相互作用、その源、パターンメイキングと結果という「事を成し遂げる」ことに焦点があてられる。もう 1 つに、認知など (Baron, 2004) 合理性の側面でなく、情熱や感情、即応性、即興性などの非合理性が存在すること (Hjorth et al., 2003)、さらに日常的な実践といったこと、これらを認めることになる (Steyeaert, 2007)。このように、ENT を創造的で社会的・集団的な組織化のプロセスとして捉えていくことで、分析の視点や対象を企業家や企業組織のみに限定してしまうことを避けることができる。

とくにここで重要となるのが、ENT という文脈において、社会のレベルでの変化、新しさ、発展によって定義される現象ベース、すなわち社会で何が起こるかをみるということである (Welter, 2011 ; Wiklund et al., 2011)。この点に関連して、たとえば、Gaddefors と Anderson は、ある田舎町に羊が来てから、その周

りに起業が生じていくプロセスを具体的な現象から説明し、そのありさまをアントレプレナーシープ (entrepreneursheep) と表現した (Gaddefors and Anderson, 2017)。このように社会のレベルから、プロセス、人、場所との間のつながりが ENT を説明するのに役立つ (Anderson et al., 2012)。しかしながら、こうした起業行為と社会の変化とは相互作用の関係にあることは明らかであるが、現象を捉えることは難しく、実証は限定的であることが知られている。起業行為が社会にどのような変化をもたらしたか、さらに社会の変化がまた新たな起業行為を引き起こしたか、という学術的問いに価値がある。

### 3. 中小企業を研究する視点<sup>3</sup>

経済社会において存在する企業の圧倒的大多数は中小企業であることに疑いはないであろう。とくに日本においては、本来ほっておけばなくなるはずの中小企業は、その比重を下げることなく存立してきた (拙稿、2022b)。これを中小企業の「存立」という。日本の中小企業研究では、なぜ中小企業が存立してきたかをその実態から解明しようとしてきた。

中小企業の存立実態を解明するにあたり、その研究視点をどこに設定するかという問題がある。この研究視点には、個人レベル、組織レベル、社会レベルがある。第1に、個人レベルで中小企業を捉える場合、企業家の意思決定が組織全体に影響を与えることが強調されている。中小企業における「個人」とは、主にオーナーやトップ・マネジャーといった企業家を指し、彼らの意思決定や行動が企業の運営に直結している。企業家の意思決定プロセスや日常的な行動の意味を捉えるために、現象学的手法やライフ・ヒストリー、ストーリーテリングといったアプローチを用いることで、企業家がどのように企業を導いているかを理解することができる。第2に、組織レベルで中小企業の実態を考察する場合、企業は代表者個人とは異なる組織体として機能している点が重要である。たとえ小規模であっても従業員が存在する場合、企業は組織としての側面を持ち、代表者以外の役割や階層が存在することになる。特に中小企業では、階層が大企業ほど複雑ではないため、マネジャーだけでなく一般の従業員も含めた組織全体を対象に分析することが求められる。組織レベルの分析を通じて、中小企業のパフォーマンス

---

<sup>3</sup> 本節の詳細については、拙稿 (2022a) を参照のこと。

に影響を与えるメカニズムを解明することができる。第3に、社会レベルでは、中小企業が地域社会との相互作用を通じてその存在意義を持つ点が指摘されている。企業は社会的な存在であり、事業活動を通じて地域の顧客や地方公共団体と関わりを持つ。中小企業の事業範囲は多くの場合、特定の地域に密着しており、「パーソン・イン・コミュニティ」であると言われるように (Cobb, 2007)、その地域社会の一部として機能することが多い。企業の代表や従業員がその地域に居住している場合、彼らの家族とも関わりが生じるため、中小企業は地域社会に深く組み込まれた存在といえる。社会レベルの分析を通じて、中小企業が地域社会の構成要素としてどのように機能しているか、またその影響を解明することができる。以上のように、中小企業がいかに存立している（きた）かという実態をみていくさいには、個人レベル、組織レベル、社会レベルのそれぞれの分析レベルごとで、その分析視点と対象とを一致させることが重要となる。

しかし、中小企業研究という場合には、そこで多くみられうるのは、個人レベルでの分析であろう。個人レベルの分析は、中小企業の代表である企業家から得た情報を基に行われることが多い。この方法では、企業家の行動や意思決定に焦点が当てられ、企業家研究として進められる。企業家の人生における起業の意味や動機を解明することが目的となるが、これは中小企業研究において重要なテーマの1つである。しかし、中小企業という組織全体を理解するためには、企業家個人の視点だけでなく、従業員などの組織構成員を含めた組織レベルでの分析が必要である。組織レベルの分析では、人的資源管理や労務管理の分野が関連しており、たとえば賃金が大企業に比べて低くても、中小企業の従業員が高い満足度を示す理由として、職場の文化や対人関係、雇用者と従業員の信頼関係が大きな役割を果たしていることが明らかにされている。(Curado and Vieira, 2019, Mazzarol et al., 2021)。中小企業研究においては、中小企業という企業組織を論じようとその視点を強調するのであれば、個人だけでなく、組織をも分析対象に加えた研究がよりいっそう展開されるべきであろう。

また、中小企業研究では、政策的見地から、中小企業が地域に根ざした社会的な存在であるとして位置づけられることがある (佐竹, 2021)。中小企業研究では、そうした社会的な分析視点をもちながらも、分析対象としては企業家個人に焦点が当てられがちである。しかし、分析レベルの観点から、社会レベルで中小



企業を分析するとなると、中小企業は社会を構成する多様な主体の1つとし、社会を構成するさまざまな主体の行為との間の相互作用を描くことになる。こうした社会レベルでの分析は、中小企業の社会的な性質をより具体的に描き出していくうえで重要な示唆をもたらすであろう。こうした社会レベルでの分析は重要な視座をもたらすことを前提としながらも、中小企業研究という限りにおいては、社会における中小企業の組織体そのものや諸活動など組織レベルに重きを置くことで、敢えて「組織レベルを越え」(Welter, 2011; Wiklund et al, 2011) ないかたちで、組織レベルと社会レベルとを複合的に組み合わせた研究がよりいっそう展開されるべきであろう。

中小企業研究は、中小企業の代表個人のみの情報をもって、中小企業をめぐる現象を説明しようとする傾向がある。しかしながら中小企業研究の射程は企業であり、となれば、その企業組織をめぐる現象を説明することがまずもって重要となる。組織をめぐる現象を説明するためには、分析レベルの観点からすれば、組織レベルとして分析視点とその対象とを一致させなければならない。そしてそのうえで個人や社会などの異なる分析レベルを組み合わせ、さらに同時に時間を注視してそのプロセスを描いていくことが、中小企業研究において重要になると考える。ただし中小企業研究が中小企業を研究対象の中心に据えるとは言え、企業のあり様を説明することに没頭してはならない。Tsoukasはその現象を説明することをめぐって、研究者は、「ここで何が起きているのか」という問いに答えながら、「これは何の事例なのか」というより広い問いに答えるために、状況的な特異性を捉えることを求めている (Tsoukas, 2009, p.298)。中小企業研究におけるプロセスの視点は、中小企業それ自体を説明するというよりかは、むしろその中小企業が存立している(きた)なかで起きている(きた)現象を説明していくことにあるのである。

#### 4. 小結—アントレプレナーシップ研究と中小企業研究—

これまでみてきたように、ENTは、日本でよく言われている企(起)業家精神といったようなアントレプレナー個人の精神論にもはやとどまらないことは明瞭である。ENTの対象は、個人だけでなく、組織や、個人と切り離れた機会、さらに環境も含まれる。さらに、ENTは、起業を生じさせる、機会の創造にかかる動

態的視点へと研究展開していくことで、研究の中心軸をプロセスへと移行させていくだけでなく、起業にかかる諸活動を含む社会現象（起業行為と社会との相互作用）における複雑性やダイナミズムを取り扱う。さらにそこでは、企業成果など合理性といった側面だけでなく非合理性も、さらに経済的価値だけでなく社会的価値も含むようになる。ENT の概念は、極めて多義的であるが、それぞれの知識の包括的な統合が進められる必要性が主張されていたが（van Burg and Romme, 2014）、ENT 研究はまさにその途中にある。

中小企業研究では、中小企業の代表者個人に焦点が置かれがちであったが、雇用する従業員をはじめ、さまざまなステークホルダーとの社会的な関係にも焦点が置かれるべきであろう。また、中小企業は社会のなかで存立し続けてきたし、今後も存続していく。そして社会に対して経済的にもまた社会的にも重要な役割を果たしてきたし、今後も果たしていく。Ramoglou と McMullen は、ENT 研究を理解していくために ABC 理論からあらためてアプローチしている。ここでいう ABC 理論の A は、企（起）業家の実現したいと望む世界の状態を表す、B は、その行動方針がどのようにして A を実現できるかを表す、C は、B の行動によって世界の状態である A がなぜ実現可能であるかの理由を表す（Ramoglou and McMullen, 2024, 278）。中小企業がこれまでに多く世界のなかで中小企業として存立し続けてきたのは、社会から必要とされてきたからでもあるが、一方で、中小企業が望ましい社会の実現に向けて行動し続けてきたからである（拙稿、2024）。このように考えると、中小企業がなぜ社会において存立し続けてきたかという中小企業研究は、企業の持続可能な経営という観点からみた場合には、知識の包括的な統合が進められつつある ENT 研究といっそう関連しながら、展開していくことになるであろう。

#### 参考文献（アルファベット順）

- Alvarez, S. A. and Barney, J. (2005) “How entrepreneurs organize firms under conditions of uncertainty,” *Journal of Management*, 31(5) : 776–793.
- Anderson, A. R., Drakopoulou Dodd, S., and Jack, S. L. (2012) “Entrepreneurship as connecting : Some implications for theorising and practice,” *Management Decision*, 50(5) : 958–971.

- Baron, R. A. (1998) "Cognitive mechanisms in entrepreneurship : Why and when entrepreneurs think differently than other people," *Journal of Business Venturing*, 13(4) : 275-294.
- Baron, R. A. (2004) "The cognitive perspective : A valuable tool for answering entrepreneurship's basic "why" questions," *Journal of Business Venturing*, 19 (2) : 169-172.
- Brixy, U., Sternberg, R., and Stüber, H. (2012) "The selectiveness of the entrepreneurial process," *Journal of Small Business Management*, 50(1) : 105-131.
- Busenitz, L. W., West, G. P., Shepherd, D. A., Nelson, T., Chandler, G., and Zacharakis, A. (2003) "Entrepreneurship research in emergence : Past trends and future opportunities," *Journal of Management*, 29(3) : 285-308.
- Calás, M., Smircich, L., & Bourne, K. (2009) "Extending the boundaries : Reframing 'entrepreneurship as social change' through feminist perspectives," *Academy of Management Review*, 34 : 552-569.
- Cantillon, R. (1931) *Essai sur la nature du commerce engeneral*, edited and translated by H. Higgs, London : Macmillan.
- Cardon, M. S., Foo, M.-D., Shepherd, D. A., and Wiklund, J. (2012) "Exploring the heart : Entrepreneurial emotion is a hot topic," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 36(1) : 1-10.
- Cardon, M. S., Wincent, J., Singh, J., and Drnovsek, M. (2009) "The nature and experience of entrepreneurial passion," *Academy of Management Review*, 34 (3) : 511-532.
- Chiles, T. H., Bluedorn, A. C., Gupta, V. K. (2007) "Beyond creative destruction and entrepreneurial discovery : A radical Austrian approach to entrepreneurship," *Organization Studies*, 28(4) : 467-493.
- Cobb, J. B. (2007) "Person-in-community : Whiteheadian insights into community and institution," *Organization Studies*, 28(4) : 567-588.
- Covin, J. G. and Slevin, D. P. (1991) "A conceptual model of entrepreneurship as firm behavior," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 16(1) : 7-24.

- Curado, C. and Vieira, S. (2019) "Trust, knowledge sharing and organizational commitment in SMEs," *Personnel Review*, 48(6) : 1449–1468.
- Dew, N. and Sarasvathy, S. D. (2002) "What effectuation is not : further development of an alternative to rational choice," Paper presented at the Annual Meeting of the Academy of Management, Denver, CO, 12 August.
- Dimov, D. (2007) "From opportunity insight to opportunity intention : The importance of person–situation learning match," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 31(4) : 561–583.
- Drucker, P. (1985) *Innovation and Entrepreneurship*, Butterworth-Heinemann Ltd. (上田惇生翻 (1985) 『イノベーションと企業家精神—実践と原理—』ダイヤモンド社).
- Gaddefors, J. and Anderson, A. R. (2017) "Entrepreneursheep and context : When entrepreneurship is greater than entrepreneurs," *International Journal of Entrepreneurial Behavior & Research*, 23(2) : 267–278.
- Gartner, W. B. (1985) "A conceptual framework for describing the phenomenon of new venture creation," *Academy of Management Review*, 10(4) : 696–706.
- Hjorth, D., Johannisson, B., and Steyaert, C. (2003) "Entrepreneurship as discourse and life style," In Czarniawska, B. and Sevón, G. eds., *Northern light : Organization theory in Scandinavia*, Malmö : Liber ; Oslo : Abstrakt : 91–110.
- Ireland, R. D., Hitt, M. A., and Sirman, D. G. (2003) "A model of strategic entrepreneurship : The construct and its dimensions," *Journal of Management*, 29(6) : 963–989.
- Johannisson, B. (2002) "Enacting entrepreneurship using auto-ethnography to study organization creation," *Conference on Ethnographic Organizational Studies*, University of St Gallen, Switzerland.
- Krueger, N. F., Jr. (2000) "The cognitive infrastructure of opportunity recognition," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 24(3) : 5–23.
- Lumpkin, G. T. and Dess, G. G. (1996) "Clarifying the entrepreneurial orientation construct and linking it to performance," *Academy of Management Review*, 21(1) : 135–172.



- Mazzarol, M., Soutar, G. N., McKeown, T., Reboud, S., Adapa, S., Rice, J., and Clark, D. (2021) “Employer and employee perspectives of HRM practices within SMEs,” *Small Enterprise Research*, 28(3) : 247–268.
- McMullen, J. S. and Dimov, D. (2013) “Time and the Entrepreneurial Journey : The Problems and Promise of Studying Entrepreneurship as a Process,” *Journal of Management Studies*, 50(8) : 1481–1512.
- McMullen, J. S. and Shepherd, D. A. (2006) “Entrepreneurial action and the role of uncertainty in the theory of the entrepreneur,” *Academy of Management Review*, 31(1), 132–152.
- McMullen, J. S., Ingram, K. M., and Adams, J. (2021) “What makes an entrepreneurship study entrepreneurial? Toward a unified theory of entrepreneurial agency,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 45(5) : 1197–1238.
- Miller, D. (1983) “The correlates of entrepreneurship in three types of firms,” *Management Science*, 29(7) : 770–791.
- Moroz, P. W. and Hindle, K. (2012) “Entrepreneurship as a process : Toward harmonizing multiple perspectives,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 36(4) : 781–818.
- Ramoglou, S. and McMullen, J. S. (2024) ““What is an opportunity?” : From theoretical mystification to everyday understanding,” *Academy of Management Review*, 49(2) : 273–298.
- Rindova, V., Barry, D., and Ketchen, J. D. (2009) “Entrepreneurship as emancipation,” *Academy of Management Review*, 34(3), 477–491.
- Sarasvathy, S. D. (2003) “Entrepreneurship as a science of the artificial,” *Journal of Economic Psychology*, 24(2) : 203–220.
- 佐竹隆幸（関智宏責任編集）(2021) 『中小企業政策論—持続可能な経営と新しい公共—』 関西学院大学出版会。
- Schatzki, T. R. (2005) “The sites of organization,” *Organization Studies*, 26(3) : 465–484.
- 関智宏 (2022a) 「中小企業の分析をめぐる視点と対象—アントレプレナーシップ

- 研究領域における個人、組織、社会レベルでの分析レベルの考察—」大阪経済大学中小企業・経営研究所編『深化する中小企業研究—中小企業研究を本質論、経営的、政策的側面から捉える—』同友館, pp.33-55。
- 関智宏 (2022b) 「日本の『中小企業研究』と『日本の中小企業』研究—経営学領域からみた日本における中小企業研究のアイデンティティとその展望—」同志社大学商学会『同志社商学』第74巻第2号, pp.297-315。
- 関智宏 (2024) 「社会的価値共創をつうじた中小企業の持続可能な経営」同志社大学商学会『同志社商学』第75巻第6号, pp.265-277。
- Shane, S. (2003). *A general theory of entrepreneurship : The individual-opportunity nexus approach to entrepreneurship*, Cheltenham, UK : Edward Elgar.
- Shane, S. and Venkataraman, S. (2000) “The Promise of Entrepreneurship as a Field of Research,” *Academy of Management Review*, 25(1) : 217-226.
- 清水洋 (2022) 『アントレプレナーシップ』有斐閣。
- Steyaert, C. (2007) “Entrepreneurship as a conceptual attractor : A review of process theories in twenty years of entrepreneurship studies,” *Entrepreneurship & Regional Development*, 19(6) : 453-477.
- Tsoukas, H. (2009) “Craving for generality and small-N studies : A wittgensteinian approach towards the epistemology of the particular in organization and management studies,” in Buchanan, D. and Brymanm A., eds., *Sage Handbook of Organizational Research Methods* : 285-301, London : Sage.
- van Burg, E. & Romme, A. G. L. (2014) “Creating the future together : Toward a framework for research synthesis in entrepreneurship,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 38(2) : 369-397.
- Webster, F. A. (1977) “Entrepreneurs and ventures : An attempt at classification and clarification,” *Academy of Management Review*, 2 (1) : 54-61.
- Welter, F. (2011) “Contextualizing entrepreneurship : Conceptual challenges and ways forward,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35(1) : 165-184.
- 山田幸三・江島由裕編著 (2024) 『1からのアントレプレナーシップ (第2版)』碩学舎。